誰かの英雄に成りたくて

パーカス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分以外の記憶を失った夜霧は、第２の人生を神の使徒として数多の世界を旅して行く……

そこで待ち受けているのは、神々の失態によって生まれた〝偽りの神獣〟…！

その世界の者達と共に、絶望的な困難に立ち向かう!!

数々の世界で、神々ですら予想だに出来ない事を意図も簡単に成し遂げる彼を神はこう呼んだ……

星の奇跡を自在に操る者……『神星の怪盗』と!!

だが当の本人はこの事を一切知らないらしい……

※あらすじを少し変更しました

※話につれ、タグが増えたり消えたりする事があります

※原作名も変わるかもしれません

目　次

序章
新しき人生 ―― 1
ハイスクールＤｘＤ　～目覚めし怪盗とおっぱいドラゴン
転移 ―― 12
お客人 ―― 32
厄日の朝 ―― 36

序章
新しき人生

結構から言うと、俺は死んだ

どういった経緯で死んだか分からんけど、死んだ事は分かっている

そして俺は今、真っ白な場所で1人座り込んでいた

頭がこんがらがって、何から悩み解決すればいいか分からない……

とりあえず、先に自分の記憶を確認する事にした。

俺は夜霧翔、２００２年１０月生まれで年齢は１８歳……

中学の頃から学校には行かず、ゲームやアニメが大好きな引きこもり……

悲しい経歴だが、一応自分の名前等は覚えているみたいだ。

でも少し、おかしな点に気付いた。

自分以外の周りに関しての記憶が一切覚えていないのだ

家族の顔も名前も、友達……はいたかどうか知らないけど、そっちの記憶に関しては何も覚えていないみたいだ

頭を悩ませて思い出そうとするが、頭に浮かぶ思い出の映像には俺に話し掛けて来る人達にモザイクがかかり、更にはその人の声にはノイズがかかる

死んだ時に自分以外の記憶も失ってしまったのか？

それとも元々俺には家族や友達などと呼べる記憶が存在しないのか？

可能性的に前者の方が信憑性が高いな……

もし後者であるなら、頭に浮かぶあのモザイクの人達は誰なんだ？ってなる

でも、何故だろう？

別に記憶が無くていいや、て思えちゃうのは……

もう死んだから思い出さなくていいって思っているから？

と、悩んでいると俺の目の前で眩い光が現れる。余りの眩しさに手で目を覆い、光が収まるのを待った。

すると、光の中に人の形をした何かが見えた。それは光が徐々に収まると同時に、よりはっきりと視認出来るようになる。

そこには――――――

「こんにちは、突然ですが貴方は死んでしまいました」

布1枚で大事な部分だけ隠された露出狂の女がいた。

やっば

ぜってぇヤバい人だ

てか、さりげなく俺が死んだ事を言ってきたな、この人

どうしよう

逃げようにも、ここ何にもないから逃げれる場所がねぇや

俺がそんな事考えていると、女は不思議そうな顔をしながら聞いてくる。

「あれ？あまり驚いていませんね？」

別の意味で驚いているからかな

あとこの人、もしかして神か何かか？

あと普通に可愛いな……

もし俺の生きた世界にいたら、世界一の美少女として有名になって

も可笑しくないくらいの美貌だぞ？

「あの～、何か喋ってくれませんか？流石に私だけ喋るのは寂しくなっちゃうので……」

泣きそうな顔でそう言ってくる。

泣き顔も可愛い……

いや、てか神なら心の声って聞こえるんじゃないのか？

それはアニメだけかな？

まぁ、そろそろ喋らないと泣きそうだし喋るか……

「……お前は、誰だ…？」

ヤッバ

忘れてたわ

俺、心の声と口調は、実際に言う声と口調とは違うんだった……

こう人と喋る事を嫌ってこの喋り方をし続けた結果、これが定着しちまったからもう治せねぇよ！

ほら！よく言うんじゃん！染み付いた癖は直せないって！それと一緒さ！あれ？聞いた事ない？……まぁ気にすんな！

……誰に言ってんだ？

女はとても嬉しそうに目を輝かせ、笑顔で喋りかけてくる。

「こんにちは！私は……そうですね、女神さまって呼んでください」

やっぱり神なんだ……

てか、そろそろ服着てほしいんだけど……

直視出来ないんだが

「貴方は夜霧翔さんで間違いないですか？」
「……あぁ」

これ言った方がいいのかな？
でもどうしよう……
これが神にとって当たり前の格好だったら……

「えーっと、貴方の死因ですが……貴方は覚えていますか？」
「……」

俺は顔を横に振り、否定する。

「では私からお教えします。貴方は地球時間５月１８日火曜日１３時４９分３８秒に街を歩いてた時、通り魔に背中を刃物等で刺され、お亡くなりになってしまいました」

マジか
俺、殺されたんか

「ちなみに貴方を殺した者はその後、確保されたみたいです」

ん～、俺以外に被害者とか出なかったのかな？

「俺以外にも死人は出たのか？」
「幸いながら死人は貴方だけで、他の人は軽い怪我等で済んでいるようです」

それは良かった……
まぁ、別に俺が死んでも悲しむ奴なんていないだろ
……記憶はないけど、家族とかは悲しんでくれてるかな？

「……俺の家族は？」
「……」

そう言うと、女神は言いずらそうな顔をしていた。
その顔を見て、俺はすぐに察した。

……なるほど
やっぱりそうなるよな

「やっぱり今のは無しだ」
「……そうですね、出来れば私もお教えしたくありませんので」

女神はそう言うと咳払いし、そして先程の笑顔を浮かべた。

天使だ……
いや、女神か

「暗い話はここまで！貴方には今から２つの選択肢があります！１つは地球とはまた違った別世界で第２の人生を謳歌するか、勿論初回特典で１つだけ好きな能力を選べられます！そして２つ目ですが――――」

これは異世界転生あるあるの転生か昇天の２択か？
まぁ、転生もいいけど別に第２の人生を謳歌したいとも思わないし、昇天でもいいかな～

「私達の、神の使徒になり世界を旅するか。この２択です」

……ん？
気の所為か？
今異世界転生ものあるあるでも聞いた事のないような選択肢が出

てきたぞ？

「……神の、使徒？」

「はい、簡単に言うと『神のお願いを聞く』。ただそれだけです」

神のお願いを聞くだけ？

……何か裏がありそう

それに神の使徒になる、てことは神の奴隷として戦い続けるって事なのかもしれない

考え過ぎなのかもしれないが……

「…神の使徒になったとして、何かこちらに得るものはあるのか？」

「そうですね……」

女神は悩む素振りを見せ、そして質問に応える。

「まず転生とは違い、使徒になれば特典を２つお願いする事が出来ます」

「特典を２つも？」

「はい、その人が第２の人生を神に捧げるのなら、神はそれ相応の対価を支払わなければなりません。そこで出された案は特典を１つ増やす事、それが条件です」

んー、確かに特典２つは有難いな

てか、俺の他にも使徒になった奴はいるのか？

「使徒は何人いるんだ？」

「え？」

え？

結構普通の質問したような気がするけど……

この反応……ま、まさか……

「……いない、のか？」

「ソ、ソンナコト、ナ、ナイ、ヨ」

女神は誤魔化すように目を逸らし、口調がロボットみたいな喋り方になった。

「……」

「うっ……」

黙って女神の顔を見ていたら、気まずそうな顔をしていた。が、どうやら諦めたらしく正直に話してくれた。

「……実は何度か頼んだ事はあるんですが、みんな転生したいって言って行っちゃうんです。だから、その、使徒は……いません」

なるほどな～

確かに特典２つを手にするより、別世界で自由に生きる方がよっぽどマシだな

折角の新しい人生をまた誰かに束縛されたくないもんな……

「……貴方も、転生を望みますか？」

女神が少し悲しそうな笑みと共に、聞いてくる。

「……」

さて、俺はどうしよう

転生しちゃうか、使徒になるか……

正直、俺はどっちでもいいんだけど……

女神さんのあんな悲しい顔を見ちゃったらな～

「……特典は言えばくれるのか？」

「はい、仰って下さればその力を授けます」

「なら、俺の特典は――――――」

さぁ～って、どうしよっかな～

パワー系の能力でいくか、魔法系の能力でいくか……

いや、今後の事も考えて万能系の方が良さそうだな……

よし！なら俺が望む力は――――――!!

「ペルソナ５のジョーカーの能力とＦａｔｅのエミヤの能力で頼む」

「分かりま――――――あれ？何で２……つも……」

女神は驚いた顔でこちらを見てくる。正直見つめ合うのも少し恥ずかしくて抵抗あるが、覚悟を女神に伝える為にしっかりと彼女の目を見る。

「俺がなんの役に立つか分からない。が、誰かの為に戦えるというのなら、それもいいかなって思ってな」

「夜霧さん……!!ありがとうございます!!」

「!?」

女神は余程嬉しかったのか、急に抱き着いてきた。

うぉぉぉぉぉぉ!?

まさか人生でこんな美女に抱き着かれる日が来るなんて!!

てか、この人露出凄いのに更に胸もデカいから、すごく感触がぁぁぁぁぁぁ!!

記憶はないけど、身体は知ってる!!

俺、女に抱き締められた事ない！

つまり、この人が初の人!!いや、初の神？初の神はおかしいから初の女？
何か卑猥に聞こえるかも……
「そろそろ離れて欲しいんだが……」
「あ、ご、ごめんなさい!!嬉しくてつい……」
「……そうか」

流石は俺ッ！
心の声と言ってる事が全く違う!!
更に言えば、表情も作ってるから向こうから見たら冷静沈着の口数が少ない絡みにくい男に見えている筈だ！
いや～、記憶はないけどこの才能を身に付けた前の俺には感謝しないとな！
サンキュー!!
「えー、では、夜霧翔さん。貴方は今から私の……神の使徒として生きる、という事でよろしいですね？」
「あぁ……ん？」

あれ？今、『私の』って言わなかった？
女神は1冊の本を取り出し、何かを書き記す。――――すると。
「なッ!?」
俺の足元に変な魔法陣が現れ、女神が何かを唱えると魔法陣は光を放ち、光が俺を飲み込んでいく。
「これより早速、貴方には世界を旅してもらいます。安心してください。最初の世界は割と簡単な世界にしますから」

女神は満面の笑みでそう言って、手を振る。

いやいやいやいやいやいやいや!?

可愛い笑顔だけども!?

能力について説明とかその他諸々の説明はッ!?

そんな俺の心の声は聞き取って貰えず、魔法陣の中へと引きずり込まれた。

目を覚ますと、そこは森の中だった。

辺りは高々に立つ木々ばかりで、ここが何処の世界か判断する事が出来なかった。

俺は立ち上がり、木々の間から光が射している方へ歩き出した。

森から脱出すると、視界に様々な建造物と住宅地が写った。

そして頭に突然ナビのような声が聞こえそれを最後まで聞き、俺は心の中で苦笑いを浮かべながら絶望した。

いやいや、女神さま……

何処が簡単な世界なんスか……

〝ようこそ、ハイスクールＤｘＤの世界へ〟

?????

《第1話　新しき人生》

?????

ハイスクールＤｘＤ　～目覚めし怪盗とおっパイドラゴン

転移

この世界の名を知った俺は、風通しの良い場所に移動し座り込み、住宅街を見下ろしていた。

溜息をつきながら……

「はぁ……」

何処が簡単な世界なんスか？

明らかに難易度フルＭＡＸじゃん

戦闘経験無いんだよ？まだ戦い方もわかんないだよ？

あの神様は鬼畜神なのかな？

しかもあれからナビみたいな声は聞こえないし、返信も返せないし、どうしたらいいの？

もう一度言うよ？どうしたらいいの？

そんな感じで俺が黄昏ていると、視界にモニターが突如現れた。

「ッ!?」

うぉ!?びっくりした……

何？このモニター？

てか、どっから現れた？

モニターに触れようと手を伸ばすが、そのモニターに触れる事は叶わずすり抜ける。

何度も触れようと試みるが、全てすり抜けるだけで終わる。

しばらくすると、画面にノイズが走った。

そのノイズが徐々に収まっていくと、画面に俺をこの世界に送り込んだ張本人の姿が映し出された。

『あぁーあぁー、映ってる～？』

「あ、あぁ」

『うん、声量調整もバッチリだね』

何でもありなの？この神様は？

『さて、とりあえず転送は出来たみたいで安心しました』

「…そうか」

『はい。では、これから貴方の役割と貴方の能力についてお教えします』

待ってました！いや、てか遅くない？

転送前に教えるのが普通じゃない？

俺の心の声等届くはずも無く、女神は淡々と説明に入った。

『まず貴方には各世界に現れる〝偽りの神獣〟を倒してもらいます』

「〝偽りの神獣〟？神獣とは何か違うのか？」

モニターにネットで見た事あるような神獣の画像が、次々と画面に映り出した。

『神獣とはまた別種のものです。本来神獣とは神話や伝説などで伝承される主の事をいいます。生物、種族、精霊、怪物、魔物等の存在が神獣に値しますね』

へぇー、そうなんだぁ…

まっっっったく、知らなかった……

へぇ～、そうだったんだ…

『そんな神獣達とは全く異なる存在が〝偽りの神獣〟です』

「…なるほど」

名前からして強そうなのはさておき

そんなヤバそうなヤツがいたんだな…

「その〝偽りの神獣〟は神獣とは容姿が違うのか？」

その質問に対し、女神は首を横に振り否定する。

『〝偽りの神獣〟は神獣の元を複製して作られています。容姿は疎か、性格も酷似しています』

「それだと倒す事も出来ないぞ？」

『……倒す事も出来ない、ですか…』

女神が小さく呟き声を上げたが、俺はそれを聞き取る事は出来なかった。

『ご安心下さい。〝偽りの神獣〟は神獣の容姿を酷似はできますが、色彩までは似せる事は出来ません』

「…色が違うのか？」

『はい。〝偽りの神獣〟は全て黒化しています』

Ｆａｔｅで言うと、オルタ化、みたいなもんか？

『更にいえば、〝偽りの神獣〟には黒いオーラを纏っています。そして神獣とは違い、理性等は存在しません』

ただの化け物じゃねぇか

いや、人間にとっちゃ神獣も化け物には違いないか…

『質問等はございませんか？』

俺は顎に手を当てながら、考える。

質問かぁ…

聞きたい事山ほどあるけど、聞いてもわかんないからいいや

「いや、問題ない」

『！そ、そうですか、一応貴方の端末にデータは送っておきますので、忘れた時はそちらを確認してください』

端末？何処にそんなんがあるんだ？

『では、続いて貴方の能力についてです』

待ってました!!

端末の事は後回し！

『貴方のご所望通り、ペルソナ５のジョーカーの能力…そして、Ｆａｔｅのエミヤの能力を与えています』

おぉー!!つまりエミヤみたいに双剣やら弓なんかで敵をやっつけたり、ジョーカーみたいにペルソナ使って窮地を打破したり出来るのか！

『貴方はす――――で、あつ――――には――――い』

女神が能力について説明をしようとしていた時、モニターにノイズが走り、声が途切れ途切れになる。

は？え？は？
ちょ、ちょっと待って!?
説明途中で切れるのだけはやめて!?
多分今大事な話してくれてるから!!

そんな俺の心の叫びなどは聞き届く筈もなく、ノイズは次第に激しさを増していく。

『ま――――こ――――お――――』

そして、最悪な事に女神との連絡は途切れ、モニターはその場から姿を消した。

嘘……だろ…？
俺…終わった…？

俺は絶望の底に落とされた感覚がし、膝から崩れ落ちる。だが俺は、何か思い出しすぐさま立ち上がる。

そうだ！
あの神さんが言ってた端末に書いてんじゃねぇのか？

すると、今更ながらポケットに何か入っているのに気が付く。それを取り出すと、生前の頃に持っていた自分のスマホが出てきた。

これが神さんが言ってた端末？俺のスマホじゃん
ま、いっか
逆にありがてぇし

俺はスマホを起動し、女神から送られてきたデータを軽く見ながら

スクロールしていく。
しかし、自分が今欲している事は何一つ書いていなかった。

マジかぁぁぁ
使い方もわかんねぇんじゃ能力を持ってる意味がねぇよ…
これが本当の、宝の持ち腐れってやつか？

そう落ち込んでいると、突然スマホの通知が鳴り出した。
俺は通知の内容を確認した。――――その時。

「な!?」

スマホの画面に仮面を付けた俺の顔が写っていた。よくよく見ると、自分の今の格好がジョーカーの姿そのままになっていた。

は!?さっきまで俺普通に私服だったよな!?
何でいきなりジョーカーの格好になってんだ!?
しかも仮面まで付けて……
どうなってんだ？てかこのまんまだと街に行けねぇぞ？

と、内心で驚きながらも、とりあえずで通知の内容を確認した。するとそこには――――

――――貴方の寝泊まりする場所はマップに提示しているのでそちらを確認しながら向かってください。
それと能力についてなんですが２つ以上のアニメ能力を得る時、どちらか片方の能力の持ち主の格好になりますので、そこはご了承ください。もしその格好を脱ぎたい時は頭の中で念じれば脱ぐ事が出来ます。勿論、その逆も同じ要領でやっていただければ着ることが出来ます。
貴方が無事やり遂げてくれる事を信じています

女神より――――――

そう書き記されており、俺は今一度自分の格好に目をやる。

これで頭ん中で念じれば脱いだり着たり出来るって、便利だな～

どれ、いっちょ試してみますか！

俺は脳内で〝消えろ〟と念じると怪盗服と仮面が消え、先程までの服装に戻っていた。

おぉー!!

凄ェ！こんな便利な機能、生前にも欲しかったぜー！

よし！今度は逆でやってみよう

そして今度は脳内で〝纏え〟と念じると、仮面と怪盗服を身に纏う事に成功した。

便利～！

そう思っているとふと、気が付いた事が出来た。

ペルソナ5を見た事があるから分かることだが、ジョーカーは確か契約した後に仮面が現れた筈だ。だが、俺はその契約すらしていないのに、仮面を付けている。

つまり……

俺は恐る恐る仮面を掴み、周りに誰もいない事を確認した上で、あのセリフと共に仮面を取った。

「…ペルソナ」

しかし何も起こらず、外した仮面は手に残ったままだった……

だが、俺は冷静にもその現実を受け止めた。

まぁ、分かりきってた事だけど、いざ使えないってなると悲しいな…

それよりも……

ペルソナが使えないっというよりももっと深刻な悩みが出来てしまったのだ。――――それは。

ペルソナが使えない今の俺って、コスプレ……だよな？

俺、めっちゃ恥ずかしいんだけど……

コスプレイヤーさん達には尊敬するよ…俺、恥ずかし過ぎて死にそうだよ……

使えないんじゃ意味無いし、恥ずかしいから脱ごう…

と、脱ごうとした時、自分の身体に異変を感じた。それも深刻な方面ではなく、逆に体力や力などが上がったような感覚だった。

あまりにも不思議な感覚だったからそれを試す為、不可能だろうと思いながら自分の身長よりも何倍にも高い木に向かって軽く跳ねる。

すると何の抵抗もなく一瞬で木の枝まで飛躍し、その枝に着地する。

エ？え？……え？

待って？めっちゃビビったんだけど…

明らか人間の脚力じゃないよね？普通ジャンプしただけでこんなに飛べないよね？

俺は今どれ位の高さにいるのか確認する為、下を覗き見ると、地面から何メートルも離れた場所に位置していた事が分かった。

うわたっか!?

これ降りたら脚の骨折れるぞ!?

てか身体能力も影響してんのか？
と、とりあえず降りてみるか……

俺は勇気もって下に降りると、ジョーカーのように鮮やかな着地を決め、着地した衝撃等はくる事はなかった。

これ明らかに両方の身体能力得てんな…
一応ジョーカーみたいに怪盗プレイは出来るみたいだな…
まぁ、とりあえず身体能力が上がってるのは知れて良かった…

俺は軽く笑みを零し、怪盗服から私服に変え指定された場所まで歩き出した。

スマホのマップを見ながら、住宅街を歩いていた。先程まで持ってなかった鞄を肩に掛けながら……
鞄は街に入る前に草木の間に手紙と一緒に置いてあった。その鞄は当然自分が生前に持っていた鞄だったので、すぐ自分のだと気付き、回収した。
中身はスマホの充電器にヘッドホン等が入っていた。
マップを見ながら進んでいると、目的地に到着した。しかもその目的地は何故か見た事ある家だった。

あれ？俺この家見た事あるぞ？
あれ～？何処で見たんだっけ？
ん～……思い出せねぇ…

そう悩んでいると、学生服を着た男に声を掛けられる。

「俺の家の前で何してんだ？」

声のした方へ振り返ると、その人物の正体に驚かずにはいられなかった。

兵藤…一誠……

兵藤一誠…

ハイスクールＤｘＤの主人公でもあり、おっパイドラゴンの称号を持つ男……

何故主人公がここに居るんだ？と思った時、チラッと見た表札に衝撃の名前が書き記されていた。

――――――兵藤、と

おいおいおい…

聞いてねぇよ……

何で主人公の家に来させたんだよ女神さま～

「まさか…」

何かに気付いた一誠に、どう言い訳しようか脳をフル回転させ考える。

だが、その考えは杞憂に終わった。

「あんたが夜霧翔か！」

「は？」

「あれ？違ったか？」

「いや…何で俺の名前を……」

「え？いや、普通に母さんが言ってたから…」

どういう事だ？

何で女神さんは主人公の家を指定したんだ？
意味がわからん…

「ま、とりあえず入れよ！」
「あ、あぁ」

そう言われるがままに、俺は兵藤家に入った。

「母さん、ただいま～！」
「おかえり～ってあら？そちらの子…」
「あぁ！あの夜霧翔だってよ」
「まぁ！遠い所からよく来たね！」
「は、はぁ…お邪魔します」
「そうかしこまらなくてもいいのよ！今日からここは貴方も私達の家族の一員なんだから！」

一体どういう設定で俺はここに来たんだ？
意図が全く掴めん…

一誠は自分の部屋に鞄を置きに行き、俺は一誠の母に居間まで案内され、椅子に座り出されたお茶を飲みながら話を聞く。

「さて、今日は長い距離を歩いて来て疲れたでしょ？今日はゆっくり休んで、明日色々と準備をしましょ」
「…準備とは？」
「あら？聞いてないの？貴方を駒王学園に通わせてって書いてたけど」

そう言って一誠の母は1枚の紙を俺に見せてくる。そこには確かに、駒王学園に通わせてっと書いてあったが、その紙の1番下に何か書いてある事に気付いた。

――――やっほー女神様だよ？
ここから先は貴方にしか見えない事を書いてあるから、黙って読んでね？
まず貴方には宿泊場所として、この世界の主人公の家にしておいたよ。そっちの方が色々と情報収集が便利になるかな～？って思ってね！
それと、この家の者達には貴方が遠くから来た親戚の子って言う認識にしてあるから、貴方にもその設定で過ごしてほしいの！お願いね！
じゃあ、これから頑張ってね！応援してるから！
女神より――――

テンションたっか
前の文脈よりテンション高いぞ？どした女神さん？

「はぁ…」
「どうしたの？はッ！もしかしてそんなに疲労が溜まってるの!?」
「い、いや、そういう訳じゃ――――」
「そう言う事なら早く言ってちょうだい！一誠！」

俺の言葉に聞く耳を持たず一誠の母は一誠を呼び出す。すると、遠くの方から「はーい！」と返事が返ってき、一誠が顔を出す。
「翔ちゃんは疲れてるみたいだから部屋まで案内してあげて」
「はーい！じゃあ案内するから着いて来な！」

俺が疲労してるのが確定になってしまったので、もう言葉に甘えて休む事にした。
部屋まで案内してる途中で、一誠が唐突に話題を振ってくる。

「なぁ！」
「なんだ？」
「あんたの事、翔って呼んでいいか？」
「別に構わないが…」
「ホントか!?じゃあ俺の事はイッセーって呼んでくれ！」
「わ、分かった」

グイグイ来るな～、と思いながらも何故か少し嬉しくなった。
そんなこんなで部屋まで案内され、一誠とはそこで別れ、俺は部屋の中をぐるっと見渡した後、ベットに腰掛ける。

さて、これからどうしよっか…
女神さんが言ってた〝偽りの神獣〟の情報が欲しいんだが、今の俺の戦闘力でどこまで追い詰めれるのかわからんから、ちょっと腕試しもしたいんだよな…
でも、イッセーの近くにいると原作に巻き込まれそうだからそこだけは避けたいんだよな～

と考えているとふと、自分の能力でまだ試していなかったものがあった事に気が付いた。

あ、そういえばエミヤの能力、まだ使ってねぇや…
……誰もいないし、今ちょっとだけやってみよっかな

そう思い俺は手を前に突き出し、そして目を瞑り、ある魔術を唱える。

「――――投影、開始。」

すると自分の身体が急激に熱くなり、更には血の巡りがより鮮明に感じ、そして目を瞑っていても今自分の腕に魔術回路が現れているが

分かる。脳内でもその魔術回路が現れ、そしてその回路の先にある物を投影しようと、している。
手に何かが現れる。いや、その何かの正体はもう知っている。
目を開け、それを確認する。
手には剣が握られていた。
名前の無い、無名の剣。
だが、その剣は普通の剣とは少し違うように感じた。無名だからなのか分からなかったが、俺はとりあえず投影出来た事に喜ぶ事にした。

投影魔術は出来るんだ……
やったぜ！これで俺の戦闘力は急激にアップしたぜ！よし！次はエミヤのメイン武器……『干将・莫耶』を投影してみるか！

俺は再び目を瞑り、脳内にイメージを浮かばせ投影させる。

「――――投影、開始。」

先程と同じように腕に魔術回路が現れ、そして脳内で回路が光の先へと伸び続け、手に形を表し具現がしようとしていた。
――――その時。
突如、脳内の回路が赤く染まり、そして時が止まったかのように動かなくなる。そして、次第にそれは崩壊していき、強制的投影魔術を解除させられた。強烈な痛みと共に……

「グッ!?」

何とか痛みを堪え、目を開け、息を荒く吸い上げる。汗も尋常ではない程かき、身体が重く感じた。

なんなんだ？今のは……

意味わかんねぇよ…

……まさか

俺は嫌な予感を覚えながら、別の武器を投影しようとする。次に投影しようとしたのは、エミヤが使う黒い洋弓だ。

先に結果を言うと、失敗に終わった。

干将莫耶の時と同じように回路が赤くなり、崩壊していった。だが、その前に投影をやめたので痛み等はこなかったが、俺は1つの確証に至った。

もしかして俺はあの武器以外投影出来ないんじゃないか？

俺は無駄だと分かりながら、適当に脳裏に過ぎった武器を投影してみる。

――――――成功した

なんの問題もなく、右手にはＲＰＧでよく見るロングソードが握られていた。理解が出来なかった。俺は他にも投影出来る物がないか試す。

投影出来た物は剣、短剣、槍、弓、銃等の様々な武器や武器外のも投影する事に成功した。

俺は悩んだ末に、ある答えに辿り着く。

名前のある武器…つまり英雄の武器は俺では投影する事が出来ない

実験の結果、エミヤが使っていた数々の武器を投影を試みたが、投影出来たのは基本生産出来るような武器のみだった。

俺は投影し続けたせいか疲労感が凄く、着替える事無くベットに寝転ぶ。

はぁ……

何でこうも上手くいかないのかね…

内心で落胆しながら、そのまま俺は眠りについた。

「うーん、やっぱり調子悪いな～」

1人の女性がモニターの前で色々とボタンを弄っていると、その後ろから声を掛けられる。

「失礼します。仕事の件で少しお話を……何をなされているのですか？」

「ん～？ちょっとモニターの調子が悪くてさぁ～、ヨミちゃん機械系とか得意～？」

「ヨミちゃんはやめてください、私は機械系とかそういった方面は苦手です」

「そっかー、じゃあ誰かに直してもらおっと♪」

女性は上機嫌なまま椅子に座る。

その横に書類を持ってきた女性が立つ。

「姉上の言った通りに書類を持ってきたのに、姉上は何遊んでるんですか？」

「別に遊んでなんかないよ～、あと！仕事中は何て呼ぶでしたっけ？」

女性は笑顔で質問し、溜息をつきながら呆れた顔で横に立っていた女性が答える。

「はぁ……じゃあ今すぐ服を着てください――――――――――天照大御神様

そう呼ばれた女性は嬉しそうに微笑み、椅子に掛けてある羽衣を纏い書類を受け取る。

「はいはーい、じゃあ何の話があるのかな？――――――ツクヨミ？」

呼ばれた女性は真剣な顔で天照大御神に質問をする。

「何故、彼に嘘をついたのですか？」

「何が～？」

天照大御神は惚けるように書類を見ながら、聞き流す。しかしツクヨミは更に質問をしていく。

「本来、神の使徒なんて存在しません。なのに貴方は彼を存在しない神の使徒にした」

ツクヨミは少し睨むように、聞く。

「何故ですか？」

天照大御神は書類を見るのをやめ、ツクヨミを見る。

「そんな怖い顔しないで～」

「私は生まれつき目付きが悪いだけです」
「嘘だよ～、絶対今睨んでたでしょ？」
「睨んでません」
「え～」
「それより、早く答えてください」
「ん～」

天照大御神は何か悩み、そして口を開く。

「使徒に理由は２つあるよ」
「２つ？」
「１つは純粋に〝偽りの神獣〟を倒してほしいから使徒にした」
「それでしたら使徒以外の方法でも良かったのでは？」
「それが２つ目の理由なんだよ？」
「え？」
「彼をね、使徒にした理由はね……
ただ純粋に生きて欲しかったからだよ？」

予想だにしていなかった答えに、ツクヨミは呆然としていた。

「……理解出来ません。もう少し詳しく説明してください」

そういうと天照大御神は悲しそうな顔をしだした。

「姉上？」
「あ、うんうん！気にしないで！えっと、これはもし彼が転生したらの未来像なんだけど…」
「はい」
「彼はどの世界に転生しても、必ず５歳半で死んじゃうの」
「……え」

ツクヨミは理解出来ず、慌てて質問する。

「ど、どういう事ですか？普通転生した者は早くて３０位で死ぬのが当然の筈では？」

「そう、普通はね？でも彼は違う。死ぬ理由は様々だけど必ず彼は５歳半で死ぬの」

「ど、どうしてですか？」

「原因は彼の中にある〝心〟です」

「心、ですか？」

天照大御神は目を瞑り、あの時見た少年の心の有り様を思い出す。

「…彼の心には複数の鎖が繋がれています」

「鎖…」

「その鎖の１つが彼の周りに影響を及ぼし、彼を死に追いやっているのです」

「……それだと使徒にしても意味がないのでは？」

「彼が望む能力に私の加護を混ぜて起きました。これで彼が死ぬ事はありません」

「…〝偽りの神獣〟と戦わせている時点で死ぬ未来は変わらないのでは？」

「それが契約なんだもの…変える事はできないわ…でも彼が死んだ時、再びこっちに転移されるようにはしてるよ」

ツクヨミは天照大御神の机に置いてある夜霧翔の写真を手に取る。

「…それでも彼に執着する姉上の考えは分かりません」

「ヨミちゃんは実際に会ってないから分からないだけだよ～」

いつもの調子に戻った天照大御神にムスッとした顔で見る。

「じゃあその彼をモニターで見せてください。あとヨミちゃんはやめてください」
「それがモニターの調子が悪くてね、機械に詳しそうな神(ひと)に任せよっかな～って思ってて」
「それで先程までモニターを弄ってたんですね」
「ついでだしヨミちゃんも一緒に行く？」
「まぁ、暇ですしお供させて頂きますよ。あとヨミちゃんはやめてください」
「えぇ～！」

ツクヨミは先に部屋から出て行き、天照大御神はそれを追おうとした時、ふと写真に目を向ける。
天照大御神にはツクヨミに言わなかった彼に執着する理由はもう1つ存在する。
それは――――

――――彼の思考や心の声が読む事が出来なかった

神の力を持ってしても、夜霧翔の考えは全く読めなかったのだ。
しかし、神にとってはそんな異常(イレギュラー)は娯楽の1つに過ぎなかった。
彼女は今後どうなるか楽しみにしながら、ツクヨミの後を追った。

神界での夜霧翔(イレギュラー)の存在はまだ、序奏に過ぎなかった…

お客人

目を覚ますと先程まで寝ていた部屋ではなく、どこか異様な雰囲気を感じる中で、俺は椅子の上に座っていた。
辺りを見渡すと、周りには沢山の本棚で囲まれており、俺の前には机、そしてその机にも本が何冊か積み重ねられていた。
辺りを見渡した事で気付いた事は２つ…
１つは、辺りの配置物や周りの本を見る限りここが図書館だという事が分かった。
何故ここに居るかは分からないが、どうやら俺は寝ている間に図書館に飛ばされたみたいだ。
だが、ここはただの図書館ではない
それが２つに気付いた事なのだが……

図書館とは思えない程、辺り一帯が蒼色だったのだ

普通の図書館では有り得ない様な色で構成されていた。
これが俺が異様な雰囲気を感じた原因なのだ。
明らかに普通じゃない……そもそも寝ている間に図書館に居る時点でおかしいのに、図書館までもがおかしいなんて笑い話にもならない…
一刻も早くこの図書館から抜け出す方法を探そうと警戒しながら辺りをまた見渡していた、その時――――

「お目覚めですかな…」

前の席に座っていた容姿がひょろっとした姿に長い鼻をした男が俺に語りかけてきた。
この男は俺が辺りを見渡した時にはいなかった……いや、おそらくこの男は最初から居た…そしてそんな男を俺は警戒していたにもかかわらず気付けなかったのだ……

「そのご様子ですと、どうやら私の存在に驚かれておられるようだ。初めて貴方から一本取れたような気がしますな」
「初めて…？」
「ふむ……どうやら自己紹介から始めた方が宜しいようですな…」

男は不敵な笑みを浮かべながら、語り出す。

「ようこそ、ベルベットルームへ……。私の名は、イゴール。…今の貴方には、お初にお目にかかります」

今の？
先程の言葉も気になっていたけど、俺はこの男とどこか会った事があるのか？
てか、今イゴールって言わなかったか？

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所…。本来は、何かの形で〝契約〟を果たされた方のみが訪れる部屋…。貴方には、近くそうした未来が待ち受けているのやも知れませんな……いや、貴方の場合はもっと違った意味なのかも知れませんな…フフ」

やっぱり！
あの特徴的な鼻に、独特の喋り方！
ペルソナで出てくるイゴール本人で間違いない！
すげぇ～！初めて生で見た…ホンマに鼻長ぇ……
あれ？でも何でイゴールは俺と昔会った事あるみたいな言い方をしてんだ？お初じゃないのか？

「フフ…どうやら貴方の顔を察するに、私の事を思い出されてくれたようだ…」
「……お前と会うのは初めてじゃないのか？」

「えぇ…貴方とはとても長い付き合いでございました。しかし、今の貴方はどうやら記憶を失われているようだ…。ですが貴方がここ〝ベルベットルーム〟のお客人である事には変わりません」

嘘だろ？

イゴールってゲームの世界の空想人物じゃないのか？

……

イゴールは辺りを見渡し、意味深なセリフを吐く。

「それにしても…初めて貴方にお会いした時は何もない空間でしたが……この部屋の有り様は、貴方自身の心の有り様。よもや図書館に変わってしまうとは…」

「どういう事だ？」

イゴールは机に置いてある本を手に取り、ページをめくっていく。

「どうやらここにある本は全て、貴方の忘れた記憶が書かれているようだ…」

「何？」

俺は机の本を取り、本の中身を確認する。――――しかし。

「何も書いてないぞ？」

本の中身は真っ白の白紙のページだった。

そう言うと、イゴールは本を閉じ、俺に目を向ける。

「フフ…今の貴方にはご自分の記憶を見る事は出来ないようですな」

「何？」

「ここから先の話は、また別の機会に致しましょう」

すると、本棚から女の子が現れた。身長は俺よりも低く、金髪の長髪の子だった。
その少女は、イゴール近くの椅子に座り本を開き読み始める。
「ご紹介が遅れましたな、こちらは、リリアル。同じくここの住人でございます」
「……」
リリアルと呼ばれた少女は何も言葉を発さず、本を見続ける。
「彼女はご覧の通り、無口な性格でしてね。彼女の方からまた追々に自己紹介をしてくれるでしょう」
イゴールは、手に顎を置き、そして不敵な笑みを浮かべた。
「ではまた、お会いしましょう」
イゴールがそう言うと、目の前が暗くなり徐々に意識が薄れていった……

厄日の朝

視界が眩しくなり、重い瞼を開けると先程までいた図書館ではなく、昨日案内してもらった俺の部屋だった。
眩しさの原因は昨日カーテンを閉めず寝てしまった為、太陽の光が丁度俺の顔の位置を照らしていた様だ。

「朝、か…」

俺は起き上がり、部屋の常備されていた時計に目を向ける。
――――6時10分
本来なら学校へ向かう支度をする時間帯だと思うが、俺はまだ学校の手続きを終わらせていないので、起きてもやる事がない…
そこでここまでに起きた事をまとめる事にした。
まず第一にベルベットルームにて、イゴールの発言から俺はまだ何も契約などしていない事が改めて実感出来た。道理で使えない訳だ…
2つ目にエミヤの能力だが、投影魔術で投影出来る物に制限がある事が分かった。特に英雄など神話に出てくる様な武器は投影出来ない。無理に投影しようとすると全身に激痛が走り、明らかに常人には耐えられない程の痛みを伴う。
だが、身体能力は少なからず影響は受けている様で、常人の2倍もの体力に筋力、走力に飛躍力等が上がっている。怪盗道具も使った事など1度もないのに、使い方が頭に浮かぶ。
一見強そうなスペックに見えるが、それは相手が常人が相手なら、の話だ。この世界では悪魔や天使、堕天使等が街中に徘徊しているくらいの世界だ。更には俺が相手しなけきゃいけない相手は〝偽りの神獣〟なんて名前からして強そうな奴らだ。このままの能力じゃ手も足も出せず、2回目のポックリとなるだろうな…
そして3つ目……これが1番の気掛かりな点だ
それは――――

――――――イゴールとは初対面ではない、という事だ

記憶が確かならイゴールはゲームのキャラ……現実で会うなんて事は絶対にない筈だ…

それなのにイゴールは……

〝貴方とはとても長い付き合いでございました。〟

まるで何度も会っているみたいな言い方…

俺を雨宮蓮と勘違いしているか…？

いや、それはない。俺と雨宮蓮では容姿も違うし、口調も違う。似ている点といえば、俺が怪盗服を纏ったらジョーカーと少し似ているぐらいだ。

頭痛がする…

悩みの種を一気に受け取り過ぎて、どれから対処すればいいか分からない…

これ以上考えても無駄と判断し、頭を少しでもリフレッシュ出来るようにジョギングでもしようと考え、部屋を出る。

部屋を出ると居間の方からいい匂いがして、覗き見るように居間を覗く。

そこには兵藤母さんがキッチンで手際良く料理をしていた。

俺は流石に朝の挨拶はしようと思い、居間に入る。

「おはようございます…」

「あら、おはよう。早いのね」

「そうですね…早く目が覚めたので軽くジョギングでもしようかなって思いまして…」

「健康的ね～、一誠も見習って欲しいわ～」

「そうなんですね…では、行ってきます」

「は～い、行ってらっしゃい 」

兵藤家から出て、軽く辺りを見渡しながらジョギングをする。

流石に遠くまで行き過ぎると迷子になってしまう可能性があるので、ほんの少しだけ遠出をする。

色んな店があるんだな…お？

辺りを探索しながら、ジョギングしていると学校の校舎を発見した。

当然その学校は〝駒王学園〟…

俺が明日通う事になる第２の人生での学校だ。記憶は無いが学校には少し苦手意識を感じる。まぁ今更感じてもなんの意味も無いが……

俺はこれ以上行くのをやめ、元来た道を引き返す。その時に、黒い翼の様な物が目に入った様な気がするが、烏だろ、と思い再び走り出した。

――――――あの人間…

兵藤家まで戻ってき、家に入ると何やら慌ただしかった。何事か思い、会話を盗み聞きすると、

「早く朝ごはん食べなさい！学校に間に合わないわよ？」

「わかってるって！」

どうやら一誠が寝坊して学校に遅れそうになっているみたいだった。

てか俺、そんな長い間走ってたんか……
無自覚って怖いわ～

すると扉を開き、一誠が現れる。

「おう!?ビックリした…おはよう、翔！」
「あぁ、おはよう」
「てか起きるん早くね？あと何処行ってたんだ？」
「早く起きたから、気分がてらジョギングしてただけだ」
「へぇー」
「急がなくていいのか？」
「うわやべッ!?じゃあ行ってくるわ！あと！明日早く起きたんなら起こしてくれー！」
「気が向いたら」

慌ただしく一誠は家を出て行き、それを見送った後、手を洗ってから居間へ向かった。
居間に入ると机に朝食が出されていた。人数分を考えると3人分あったので、おそらく俺の分も作ってくれたみたいだ。

「あらおかえり、朝食出来たから食べていって」
「ありがとうございます」

そう言って俺は席に座り、朝食を取らせて貰った。
今日の予定だが、昼過ぎから手続きの為、1度学校の方へ行かなきゃ駄目みたいで、自室にて色々と準備をしていた。
と言っても、準備する物は筆箱くらいなのですぐ支度が終わる。
まだ時間があるので、ベットに横になり目を閉じる。
学校に行く事に不安は感じる…
記憶を失っても身体はしっかり覚えていたみたいだ…

はぁ～……行く気失せるわー…

そんな事を思っていたその時

「ッ!?」

『……我は汝…汝は我…』

頭痛と共に、脳内で掠れだが声が聞こえた。掠れ声だった為、声での男女の差別が判断出来なかったが明らかに生きている者ではない気がした。

はぁ……今日もしかして厄日かも…

俺はベットから起き上がり、窓を見る。そこには先程まで満点の快晴だったのが、曇り始めていた。俺は雨が降り始めたら厄介、と思い鞄を持って部屋を出た。

夜霧翔の本当の厄日は、ここからが真骨頂になる事も知らずに……